

論文の内容の要旨

論文題目 家と女性の働き ―戦前の日本の女性たちは家のために働いていたのか―

氏名 荻山正浩

戦前の日本では、いうまでもなく、人々は家族を構成して暮らしていた。この点を念頭に、家族という集団を家という組織として捉えたとすれば、これまで、戦前の日本では、人々は家の存続や繁栄を目的として行動していたという説明がなされてきた。この説明に従えば、個々の世帯にとって、十分な収入を得られず、家計が逼迫したならば、それは家の存続や繁栄を脅かす要因となる以上、人々は、稼得活動に従事する場合、家の存続や繁栄をはかるため、多くの収入を稼ぐことを望んでいたことになろう。だが、現実の人々の就業行動に注目すると、こうした従来の説明に疑問を投げかけるような事実が見出される。

戦前の日本では、明治期以降、工場制機械工業の勃興を契機として、工業化が本格的に進行し、それにもなって流通や販売などの経済活動も活発に営まれるようになった。こうした一連の変化を産業化として捉えたとすれば、戦前の日本では、多くの人々が農業に従事していたが、他方で、産業化の進展によって、さまざまな工場が設立されると、そうした工場働く人々も次第に増大したことが知られている。もっとも、これについては、誰もが工場働くことができたわけではなく、工場働く機会に恵まれていたのは、一部の人々に限られていたことを指摘しておかねばならない。周知のように、戦前の日本では、産業化を主導していたのは繊維産業であり、そうした繊維産業の工場には、もっぱら未婚の若い女性たちが雇用されていたからである。つまり、工場働く機会に恵まれていたの

は、そうした若い女性たちに限られていたわけである。

そこで、若い女性たちの動向に注目すると、繊維産業の工場の経営者は、高水準の賃金を支給して人手を確保していたから、農家の女性たちを例にとれば、彼女たちにとって、生家の農業を手伝ったり、各種副業に従事したりするよりも、繊維産業の工場に働きに出た方が多くの収入を手にしえた。しかも、そうした若い女性たちは生家のなかでは家長である父兄の監督下に置かれていたから、彼女たちが工場で働いて多くの収入を稼いだとすれば、父兄はそれを生家の家計に組み入れることで、家計収入を増加させることができた。こうした状況の下で、人々にとって家の存続や繁栄が重要な問題であったとすれば、若い女性たちは、家の存続や繁栄をはかるため、各種繊維工場で働いて多くの収入を稼ごうとし、父兄もまた同じ目的から彼女たちをそうした工場で働かせようとしたはずである。けれども、現実には、彼女たちは、なかなか各種繊維工場で働こうとせず、父兄もまた、彼女たちをそうした工場に送り出すのを躊躇していたという事実が伝えられている。もちろん、このことは、従来のように人々が家の存続や繁栄を目的に行動していたという点を強調するだけでは、彼女たちの就業行動を説明できないということを意味している。とはいえ、戦前の日本では、人々は家という組織を構成して暮らしていた以上、家の存在が人々の就業行動に何らかの影響を与えていたことは間違いない。では、人々が家の存続や繁栄を目的に行動したという従来の説明が十分な説得力を持たないとすれば、家の存在と人々の就業行動との間には、一体、どのような関係が存在したのだろうか。本稿の課題は、この点を明治期における大阪府泉南地方の若い女性たちの動向に即して解明することである。

まず産業化が開始される前夜の明治10年代には、泉南の若い女性たちには、稼得活動に従事するとすれば、生家で綿糸や綿布を生産するか、他家に家事奉公に出るかという選択肢しか用意されていなかった。だが、その後、明治20年代以降、泉南でも、産業化が開始され、紡績工場や織物工場が設立されると、若い女性たちは、従来のように生家で働いたり家事奉公に出たりすることに加え、紡績工場や織物工場で働くこともできるようになった。この点を念頭に、収入の違いに注目すると、彼女たちにとって、生家で働くことは、家事奉公に出ることと比べれば、収入を稼ぐうえで必ずしも有利な選択ではなく、むしろ家事奉公に出た方が生家で働くよりも多くの収入を得られた場合も珍しくなかった。また彼女たちは、紡績工場や織物工場で働いたとすれば、生家で働いた場合よりも、はるかに多くの収入を手にしえた。つまり、彼女たちにとって、多くの収入を稼ぐためには、家事奉公に出るにせよ、紡績工場や織物工場で働くにせよ、生家を離れて働いた方が生家で働くよりも概して有利であったわけである。しかも彼女たちの生家のなかには、近隣の富裕な世帯に対して債務を負い、その返済に迫られていた世帯が少なくなかった。こうした状況の下で、人々にとって家の存続や繁栄が重要な問題であったとすれば、債務を返済できず、家計が逼迫したならば、それは家の存続や繁栄を脅かす要因となる以上、若い女性たちは、多くの収入を稼いで家の存続や繁栄をはかるため、生家を離れて働こうとし、父兄もまた同じ目的から彼女たちを生家以外の就業先で働かせようとしたはずである。しかし、

実際には、彼女たちは、家事奉公に出るにせよ、紡績工場や織物工場で働くにせよ、なかなか生家を離れて働こうとせず、あくまで生家で働くことに固執する姿勢を示していた。

では、なぜ若い女性たちは生家を離れて働くことを嫌い、逆に生家で働くことを望んだのだろうか。そこで、収入以外にも、彼女たちの就業行動を左右した可能性のある要因を網羅し、それらを検討する作業を行った。具体的には、前借の有無、就業の難易、社会的評価、労働時間と労働日数、仕事の負担、仕事の性質、作業環境について検討を行った。ここでは、そのすべてに言及することはできないが、このうち、仕事の負担を例にとれば、以下の結果が得られる。まず若い女性たちが生家で綿布を生産した場合と織物工場で綿布を生産した場合に限られるものの、それぞれについて、史料からはどの程度の量の綿布が生産されたかが判明する。もちろん、生家で働くにせよ、織物工場で働くにせよ、彼女たちが仕事に励めば励むほど、多くの綿布が生産されるとともに、彼女たちにかかる仕事の負担は増大したから、こうした綿布生産量の多寡は彼女たちにかかる仕事の負担の強弱をあらわす指標となる。また仕事の負担と就業行動との関係についていえば、若い女性たちにとって、織物工場で働く場合、仕事の負担が重かったのに対し、生家で働く場合、仕事の負担が軽かったとすれば、彼女たちは、仕事の負担を免れるため、織物工場で働くのを嫌い、逆に生家で働くことを望んだとしてもおかしくはない。しかし、実際には、綿布生産量を分析すると、彼女たちは、織物工場では、ある程度の余裕を持って働いていたのに対し、生家では、限界となる水準まで仕事に励んでいたことが判明するから、彼女たちにとって、織物工場で働いた方が生家で働いた場合よりも、仕事の負担が重かったとは考え難い。この点からすれば、仕事の負担の強弱に即して、彼女たちの就業行動を説明することは不可能であろう。同じように、上述した要因を検討すると、いずれの要因についても、彼女たちの就業行動を説明できないことが明らかとなった。

だが、このことは、若い女性たちの就業行動を説明する要因がまったく存在しなかったことを意味するわけではない。これについては、就業行動の特徴として、彼女たちは生家を離れて働くことを忌避し、逆に生家で働くことを希望していたという点に改めて注目する必要がある。つまり、彼女たちにとって、仕事場が生家であるか否かがきわめて重要な問題であったとすれば、彼女たちは、何より、生家で働くことを望んでいたからこそ、生家を離れて働くことを忌避し、逆に生家で働くことを希望したというように、その就業行動を説明することが可能となる。では、彼女たちにとって、生家で働くことにはどのような意味があったのだろうか。実は、当時の若い女性たちやその家族の言動に注目すると、彼女たちは、家族と離れ、家事奉公に出たり紡績工場に働きに出たりすることを大変な苦痛に感じ、父兄をはじめ、その家族もまた同様に彼女たちと離別することを苦しめていたことが窺える。この点からすれば、若い女性たちは、家事奉公に出たり、紡績工場や織物工場で働いたりすれば、多くの収入を得られたものの、そのように生家以外の就業先で働くことになれば、家族と分かれて働かねばならず、それを忌避していたからこそ、なかなか生家を離れて働こうとせず、父兄もまたそれに理解を示していたため、収入が減るのを承知

のうえで、彼女たちが生家で働くのを容認したと考えられる。

しかし、若い女性たちの生家のなかには、負債を抱えていた世帯も少なくなく、そうした世帯は、彼女たちが生家で働いた場合、多くの収入を得られなかったから、債務を返済できず、家計が逼迫して家の存続や繁栄が脅かされるような事態に陥っていたものと思われる。もっとも、このことは、彼女たちが家の存続や繁栄に無関心であったことを意味するわけではない。彼女たちは、家族と分かれることを嫌い、家族とともに暮らすことを望んでいたが、家計が逼迫し、一家が離散して家の存在自体が消滅したならば、家族と生活を共にすることすらできなくなったからである。この点からすれば、彼女たちにとって、実は、家の存続や繁栄ほど、気がかりな問題はなかったはずである。だが、彼女たちは、そのように家族と一緒に暮らすため、家の存続や繁栄を願っていたが、皮肉なことに、家族とともに生活することを望み、家族と離別することを嫌うあまり、生家を離れて働いて多くの収入を稼ぎ、それによって家の存続や繁栄をはかることができなかったわけである。